

デイヴィッド・S・セセルスキ著  
「アメリカ東海岸

埋もれた歴史を歩く」



ノースカロライナ州ロアノーク島で1915年に撮影された女性と子ども（本書より）

空いっぱい渡り鳥。大量のニシンを捌く缶詰工場。漁師たちの裸足。百年ほど前のアメリカ東海岸で撮られた日常風景である。撮影者は、あたかもどこかでなくした自分の一部を探すかのように、海辺へ通いつつ撮り続けた。それらの写真は、出版契約まで結ばれていながら、ついに世に出ることがなかった。その理由が衝撃的である。

本書の成り立ちも興味深い。ある歴史家がこれらの写真を発掘してブログに公開した。それを読んだ友人のアメリカ研究者が翻訳を思い立ち、著者と相談の上で十編を厳選した。埋もれていた写真は、かくして日本語の本となつてついに日の目を見た。元になつたブログは今でも読める。劈頭に掲げられているのは、二〇世紀まで国勢調査にも存在しなかつたという「先住民」の写真である。撮影地は、初期アメリカ史に「失われた植民地」の名を残すロアノーク島。自分が何者であるかに確信をもちつつ、撮影者を大胆に見つめ返している。その後のアメリカ史は、二人の眼差しに耐えうるだろうか。樋口映美編訳。（彩流社、2420円） 評・森本あんり